

氏 名	竹 川 郁 雄
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 4518 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	現代日本社会におけるいじめ問題の集団論的研究
論文審査委員	主 査 教 授 森 田 洋 司      副主査 教 授 谷      富 夫 副主査 教 授 豊 田 ひさき

### 論 文 内 容 の 要 旨

いじめ問題は、直接的にはいじめる者といじめられる者との間の加害 被害関係の事象であるが、それが成立するにはその関係を構成しているさまざまな要因が作用している。本論文は、単に両者の関係を修復したり、再発を防止するという教育的指導のための直接的対処法を求める研究ではなく、さまざまな要因の中でも集団内でいじめを構成する内在的要因を検出することを目指したものである。

そのために、本研究では、集団論的アプローチをとっている。これは理論的一般化と現象面への密着を重視するからである。そもそもいじめ問題とはいじめ被害にあっている者への救済という社会的要請があって発生しているものであり、あまりに抽象的な理論による一般化が図られても理想的な説明に終わるだけであり、要請に答えることにはならないであろう。集団全体及び成員への注目、すなわちいじめ問題にかかわる集団の特徴や集団における成員の立場や指向性、集団内で作用する力動的要因やその背後でいじめを可能にしている成立要因の解明が必要となるであろう。そのために、本研究では、これまでの社会学的知見に依拠しつつも、新たにいじめと学級集団にかかわるさまざまな分析概念の設定や、現象の経過的位置づけを行い、また実際の現象に即した分析を行うために収集した調査データの徹底的解明を試みている。このように本研究は、いじめという現象を主要な対象としつつ現代日本社会に生きる人間及びその複合体としての集団の諸側面について、臨床的対応を視野に入れて理論的一般化を目指したものである。

以上の研究姿勢のもとに本研究においては、いじめ概念の規定と日常化、学級集団の特性と成員間相互作用、いじめの背景にある常識的価値志向、日常の社会規範、文化的要因などを最も重要な考察対象と考え、それぞれの章で考察を試みている。以下、各章の概要を述べる。

### 第 1 章 日本におけるいじめ問題について

いじめの概念規定の問題について、文部科学省やシェフィールド・プロジェクトのいじめの定義より問題点を論じ、いじめを定義する際の重要な論点が、1．一方的に不均衡な関係が前提されていること、2．被害側の苦痛が関わっていること、3．不当な手段による攻撃行動という点にあることを指摘している。特に3番目の攻撃手段の不当性については、従来は当然のこととして注目されてこなかったが、正当的支配の様式と同様の形でいじめに相当する攻撃が正当化される場合や、逆にいじめに相当する場合でも内部的に正当化されていじめと認識されない場合があり、いじめの事実認定を難しくしている要因となっていることを論じた。以上の考察の結果、いじめとは、その時の状況において相対的に優位に立つ一方が劣位の者に対して、通常目的と手段の間に正当的根拠がないか、あったとしても過度に及ぶ手段によって、精神的ないしは身体的な苦痛を与える攻撃行為であると定義した。そして、いじめの確定には被害側の苦痛の有無をめぐる主観的な内面状態の判断と、攻撃的行為の状況的正当性の判断という2つの判定困難な部分を伴っており、生活の場面で実際にいじ

めを確定する際の困難さについて論じている。

続いて、いじめがこれまでどのようなものとして日本社会の中で問題視されてきたかを、戦後日本でいじめ問題が大きく取り上げられた経過、官庁統計の発生件数、文部科学省（文部省）の対応の面から概観した。

## 第2章 いじめと集団に関する考察

本章では、まず標準的な単式普通学級の静態的な面に着目し、そこに見られる集団特性から学級集団を規定して位置づけ、いじめとのかかわりを考えた。学級集団は、  
・教科学習を第1の集合目標とする機能的集団であること、  
・社会化機関として教師が生活指導面の訓育をおこなうこと、  
・一定期間存続しその間成員の所属を強制すること、  
・構成員は教師以外年齢面での同質性と能力や性格などの差異性を持つこと、  
・同一空間内にあって成員が対面的相互作用をおこなうこと、  
・そこで過ごされる時間が成員の生活世界の中心を占めていること（学級集団の準一次集団化）であると位置づけた。これらの学級の集団の諸特性は、生徒の学習効果を効率的に最大化するという、第1の特性に掲げた学級の主目標を実現するために構成されているのであるが、いじめの発生という視点から見直してみると、前提要件ともなりうることをいじめ定義の3要素と関連づけて考察した。

次いで、児童生徒間での集団内相互作用を捉えるために、集団内での成員の対面的相互作用によるこれまでの集合的状態を「集団状況」と規定し、この変化の過程とともに集団全体が関与するいじめが発生することを、集団状態を分析するための5つの側面、すなわち集団の対面的伝達性、成員間連結性、持続的拘束性、情緒的統合性、集合的求心性を設定しそれぞれについて考察した。また、いじめる側の攻撃性と対になるいじめられる側の攻撃誘発性、及び他者を思いやる援助的配慮の行為と対になる誘発性の性質について考え、集合的な状況の中で攻撃と援助的配慮が分岐していく場合について考察した。攻撃になるか援助的配慮になるかは、集団内で失態をしてしまった時、失態によって生ずる挑発性が、成員の集団状況への同一化を妨害しているか、それとも同一化意識の枠内にあって違和感なく受け入れられるかが、大きな分岐点になっていることを論じた。さらに、親密な仲間集団内で、最下位に位置する者に何かと搾取する隷属的ないじめが発生することがあり、こうした隷属的ないじめを引き起こしやすい仲間集団の特徴について考え、過激ないじめへの抑止装置が十分でないことを指摘した。

## 第3章 学級集団内いじめの実証的考察

質問紙調査によって得られた児童生徒のデータを使い、いじめと学級集団の諸側面との関連性について考察した。教師の影響力といじめ発生との関連について言及した後、学級集団の半数以上の者によって指摘された「いじめられっ子」のいる学級を「察知されたいじめのある学級」として、「察知されたいじめのない学級」との違いを探究した。いじめのある学級においては、サブグループ化してまとまりやすい少数の者に親密な友人を限定する傾向があると言え、学級集団内の友人の結合状態は、サブグループ内で緊密化し、サブグループ間で相互排除的となっていることを明かにした。

次に、調査データのいじめ被害側に注目し、いじめられていたと学級の4分の1以上の者によって指摘された者で、自分を「被害者の立場」だと回答した者について彼らの回答傾向を探究した結果、学校を休む意識へと傾斜し、友達に対する許容度が弱く、いじめに対する意見も絶対許してはいけないという思いが強く意識されていない、他者の評価に対しても懐疑的であるといった傾向が見いだされた。

また、生徒の自由回答やソシオメトリの状態をみることで、女子間で固定化したいじめのある学級があることが判明し、加害側は先生にもいじめで叱られたことで反発しており、どうにもならない膠着状態であることがうかがえた。加害側生徒の異議申し立ての機会が閉じられているので、集団で結束しインフォーマルな所で被害側への不満を表出し、結果としていじめとなる、そのような場合を「弱者の集合的戦略としてのいじめ」

と規定し、そのようなケースがあることを指摘した。

#### 第4章 いじめ加害と常識的価値志向

いじめ加害の実態について4カ国の比較データを分析し、特に日本の場合について特徴を析出しようといじめ加害経験、いじめの手口、いじめ加害時の人数などについて検討した。日本の特徴として、文化的な性別意識の違いが大きいために生じたものと思われるが、他の国に比して男女差が大きく現われることが明らかとなった。

また、本章では、いじめが発生する際に日常生活に潜んでいる常識的価値志向が優位的関係性を作り出すのに作用していることを論じている。すなわち、今日一見多様に見える情報化社会において、表面に現れないまま人々の間で共通によいとされる価値志向が形成されていて、それが集団行動全体の流れを左右し、その方向に合致するような行動が選択されて日々の出来事が進行している。日常生活の感情的ないさかいによる一方的攻撃現象の局面において、いじめ加害の方を知らず知らずのうちに容認してしまうことが生じるのは、日常生活におけるこうした常識的価値志向が作用し、その目で見えてしまうため優位ないじめ加害側の立場を支持してしまうためであるとしている。

続いて、そのような常識的価値志向には、いじめ問題にかかわるものとして、 明朗、ネアカ、 ユーモア、 饒舌、 要領のよさ、迅速性、 清潔、健康があり、そのそれぞれについて考察している。そして、こうした常識的価値志向を重視するあまり、学校空間内に対人間の優位 劣位関係を発生させる結果となり、それにうまくのっとっておこなわれるいじめ加害に対して、厳しく対処できない、場合によってはいじめ加害の方に加担してしまうといった事態が生じることを論じている。

#### 第5章 いじめ問題の背景的要因としての社会規範について

いじめ問題で背景的な要因となっていると考えられる社会規範について、適用領域とサンクション(制裁面)からの分類と特徴づけを行った。さらに、社会規範は、その性質として規範的側面と拘束的側面があること、社会的場面に付随した社会規範がさまざまな面から対人関係を規制していること、集団内で自然に形成される状況適合性ルールがフォーマルルールと食い違うことにより羞恥感情を発生させることなどを論じ、いじめを発生させる対人関係や集団内の相互作用の状態について考察した。

#### 第6章 適応過剰による逸脱現象と「日本文化論」

集団状況への同一化が非常に強くなることにより、不適合な他者への制裁的攻撃がいじめとなる場合や、両親から暗黙の期待を敏感に感じ取ったり、教師や友人との対人関係のやりとりの中で彼らの期待のまなざしにさらされたりすることで、心理的な緊張が高まり、不登校状態が発生する場合や、社会に暗に潜む規範的要請に対する適応への試みが過剰になされた結果摂食障害に陥る場合について、適応過剰の問題として考察した。

このようないじめ、不登校、摂食障害の適応過剰にかかわる共通面を考察して、 . 一般的に大切だとされている規範的言説に対して非常に忠実であろうとしていること、 . 敏感で繊細な生活感覚をしていること、 . 対人関係指向が強いことを特徴としてあげ、「日本文化論」で論じられている知見との関連性について考察をおこなった。その結果、日本人の基底にある伝統的な指向性や行為様式を律儀に守っていきこうとすることにあまり熱心であるために、種々の逸脱現象形態となってしまうことを結論として見出した。

#### 第7章 いじめ問題の集団論的研究について

日本におけるいじめ現象を論じた研究を概観し、 1 . いじめる側の内在的要因に原因を求めるもの、 2 . いじめる側といじめられる側との関係性に原因を求めるもの、 3 . いじめを取り巻いている集団全体に原因を求

めるもの、4. いじめ現象発生条件となっている背景的要因を探るもの、5. いじめの社会問題化について問い直そうとするものに分けて、それぞれについての議論を整理し、いじめ現象分析への有効性を考察した。

次いで、本研究第1章から第6章までの要点を7つに分けてまとめ、集団論的視点の有効性について2点言及した。その第1は集団に注目することによって理論と具体的現象の両面からの緊密化を図ることができる点であり、第2は問題を抱えている個人や集団に焦点を当てる治療的アプローチと、問題を生じさせている背景的要因に焦点をあてる構造的アプローチの接点に位置し、両面から考察できる点である。臨床的対応を要するいじめ問題に対して、理論と現象、及び救済と構造的変革の面から多面的に捉えていくことにより、複雑な現実の問題に密着して適切な説明と対策が可能となるであろうと結論した。

### 論文審査の結果の要旨

これまでの日本におけるいじめに関する研究では、いじめる側といじめられる側、あるいはそれを取り巻く周りの人々など個人とその関係に焦点をあてた研究やマス・メディアの報道内容の分析が中心であったため、いじめが仲間集団や学級や学校という集団状況のなかから発生してくる現象でありながら、集団構造に焦点を当てた社会学的研究はほとんど皆無の状況にあった。

本論文は、こうした研究状況の中で、学級集団と仲間集団およびそこで展開される相互作用過程に着目することによって、いじめが生成されてくる集団のメカニズムを明かにしたものであり、本研究は、従来の原因論の欠落部分を埋めるとともに、いじめへの対応論や予防論に新たな視座を提供するものである。

各章で得られた成果は以下のとおりである。

第1章では、これまでの「いじめ」に関する学術的定義から共通する構成要素を析出し、いじめが優位・劣位という非対称的な力関係の中で生まれる現象であることという従来の定義の構成要素に加えて、この力関係が、集団構造や相互作用過程のなかで正当性を欠いた不当な力の行使を伴う場合にいじめとなるという新たな定義要件を導き出し、論者独自の注目すべき定義づけを行っている。また、いじめは、いじめられた側の深刻な被害を契機として社会問題化しただけに、従来の定義では、被害性の存在を構成要件とし、現実の事実認定においても被害性の有無によって判断してきている。しかし、本論文では、敢えて加害行為を要件とする立場を取っている。それは集団構造から生成されるいじめという本論文独自の視点に基づくものであり、次章以降の分析を進める上で妥当な見地であるとともに、その論議は一貫性があり、かつ説得的である。

第2章では、いじめが集団状況の中で発生してくる現象であることを明らかにし、この視点がいじめ分析において不可欠であることを提示している。そのために、制度的に編成された学級集団の特性だけでなく、児童生徒が営むインフォーマルな集団特性にも着目し、これらの集団特性から生じる攻撃行動の誘発性を明らかにしている。この誘発性は、挑発性と脆弱性の二側面からなることを指摘するとともに、これらの特性が、どのような集団状況や相互作用過程の下でいじめへと発展させる状況を作り出すのか、あるいは援助的な配慮を受けることになるのかを説得力を持って論じており、また、その分析は、いじめの対応論への新たな視座を提供するものとなっている。

第3章は、質問紙調査とそこに含まれているソシオメトリー調査から得られたデータを基にして、学級集団内部に形成されるインフォーマルな友人関係の構造やその凝集性およびこれらの集団構造への教師の影響などの集団内相互作用のダイナミズムがいじめの発生とどのように関連しているのかを明らかにしたものである。とりわけソシオメトリー調査は今日では実施不可能な調査技法であり、本論文は、そこから得られたさまざまな貴重な知見を提供するものとなっている。なお、分析にあたっては社会測定的地位指数を援用しており、いじめの有無とインフォーマルな集団での構造上の位置に関する知見は、分析技法の独創性とともにいじめ論に新たな成果を付け加えるものでもある。

第4章および第5章は、集団の基本的要素であり、かつ行為の正当性を担保する社会規範に着目し、そこか

ら生成される優位 劣位という非対照的な力関係の構造を解明している。とくに本論文では、児童・生徒の日常生活においてフォーマルな規範として存在する社会規範と、集団の具体的な状況や場面のなかで、そのときの状況に合わせてインフォーマルに形成される「状況適合的な規範」や日常生活の中で生成され表面に表れないままに集団やその下位集団の構成員の間でよいとされる「常識的価値指向」など社会規範の二重性が存在していることを理論的に明らかにしている。こうした集団構造の背後的な要因の指摘は、いじめの場面での優位 劣位関係のパワーリソースとそこから生成されるいじめのメカニズムの解明にとって新たな知見を提供するにとどまらず、社会学における集団構造とその相互作用過程分析にとっても新たな分析視座を提供するものといえる。また、本論文では、国際比較調査の結果を考察しつつ、こうした状況適合的な規範や日常生活で生成される常識的価値指向がいじめの攻撃性の日本的な特徴を形成していることをも併せて指摘している。今後、さらなる調査の積み重ねによって、こうした知見をより一般化していくことが望まれるが、比較社会分析にとって貴重な示唆を与えるものとして評価できるところである。

第6章は、日本社会の「過剰適応」の問題を取り上げ、社会規範への過剰同調から発生してくる逸脱への過剰な規制や不当な権力の行使が、いじめを発生させることを明かにし、こうした過剰適応の問題が、いじめだけにとどまらず不登校や摂食障害など他の問題事象の発生にも関わる場合があることを明らかにした。とりわけ、従来、いじめ問題の発生基盤の日本の特徴についての研究はほとんど皆無に等しい状況にあっただけに、本論による新たな知見は、この分野の研究の内実を豊かなものにしている。

終章では、日本の従来のいじめ研究における本論文の理論的な位置づけを行うため、これまでのアプローチを5つのカテゴリーに分類し、それぞれのカテゴリーについて考察を加えた上で、本論文の集団論的アプローチの有効性を論じたものである。この終章の配置については意見の分かれるところであるが、本章での従来の研究の分類・整理と本論文の位置づけは妥当であり、今後のいじめ研究の指針となりうる。

本論文の特徴は、(1)いじめの発生を集団構造とそこで展開される相互作用過程から現れる攻撃性、いじめられる側の攻撃行動の誘発性、脆弱性という新たな概念装置を提示しえたこと、(2)これらの理論的な考察を調査によって可能な限り実証していること、(3)集団のインフォーマルな構造から現れる価値指向と状況適合的な規範という日常生活を支配している集団の構造要素を新たに解明しえたこと、(4)これらの考察は、いじめ論における理論的な水準を高めるだけにとどまらず、いじめへの対応や防止論に対しても接合可能な視座に立って論じられていることが挙げられる。このことは、本論文の基となった論文と著書が社会学の領域を超えて高い評価を得ていることからもうかがえる。しかし、集団構造に潜む背後的要因としてのインフォーマルな社会規範の存在やこうした背後要因への教師の影響力については、本論文では理論的な考察にとどまっており、実証的な研究が、さらに望まれるところである。ただし、こうした問題は、本論文があっただけで期待される研究であり、本論文の価値を損ねるものではなく、むしろ本論文が新たな研究の地平を切り開いたことは高く評価できる。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。